

2012年
5月24日
木曜日

新約聖書ローマ信徒への手紙8章28節には、『神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、私たちは知っています。』(『新共同訳』、文語訳では『万事相働きて益となる。』と書かれている。ここを読むときに、経済学の父、アダム・スミスの「見えざる手」を思い出す。この「見えざる手」とは国富論の中に一度だけ出てくる言葉である。

『人は自分自身の安全と利益だけを求めようとする。この利益は、例えば「莫大な利益を生み出し得る品物を生産する」といった形で事業を運営することにより、得られるものである。そして人がこのような行動を意図するのは、他の多くの事例同様、人が全く意図していなかった目的を達成させようとする見えざる手

河野正道 教授(理論経済学)

スミスの「見えざる手」と聖書

によって導かれた結果なのである。』(『国富論』第4編「経済学の諸体系について」第2章)

このアダム・スミスの言葉の現代的解釈として、次のようによく言われる。人はすべて利己的である。これを現代の経済学では合理的経済人という。この、ばらばらに動く利己的な人たちの行動が、あたかも神の見えざる手に導かれて、全体としてうまく調和し、最適な結果がこの社会に実現する。だから、「自由放任がよい」と。

この最適な結果とは、パレート最適のことと解釈することができる。つまり、緩やかな価値観の下で、無駄なく社会の資源が配分され尽くしているという最適な状態のことである。確かに、国富論の原典に当たってみると、「人が全く意図していなかった目的を達成させようとする見

えざる手によって導かれた結果」とのみ書かれており、それがパレート最適へと導くと解釈できるか否かは疑問が残るかも知れない。しかしながら、「見えざる手」とは神の手としか解釈できず、神が導くところならば最適などところであろう、との信仰を働かせて以下のように論理を進めよう。

神が利己的な人々を導くということとは、利己的な人も利他的な人も、そのまま社会に貢献しているということを意味する。つまり、すべての人は神の御支配の中にあり、神の手に導かれている。このチャペルの最初に歌った讃美歌は「主よ、み手もてひかせたまえ」という歌詞であった。しかし、そのように自分から神様に「引いて下さい」とは思わなくても、実は引かれている。その結果、最適な状態がこの社会に実現

している。これが神のみわざである。ここでスミスの「神の見えざる手」とローマ書の「万事相働きて」が結びつく。

この「万事」とは何か。今日の全てのこのみならず、過去のすべてのこと、と解釈できる。つまり、過去に起こったすべての出来事、つまり、過去の自分自身の失敗であっても、現在や将来の自分自身の益になる、という解釈が可能である。例えば、第一志望の〇〇大学に落ちた。これはマイナスの出来事であるが、しかし、これが将来プラスになるかも知れない。それらの過去の失敗もすべて、プラスに変えて益としてくださる。これが神の愛である。どうにもならない過去の失敗も、益に変えてくださる。万事相働きて益となる。ここに神の御愛がある。